

今また教師として

竹下 士郎

現在私が勤める学校は、開校以来30年余りの歴史を持つ養護学校である。当初は、肢体に障害を持つ子どもを受け入れる養護学校として出発したが、現在では、肢体障害の他に知的障害を持つ子や、自閉症、病弱の子どもたちも在籍しており、障害の程度によっては、明日をもしれない命を精一杯燃やしながら、毎日学ぶ子どもたちがいる。学校には、小学部、中学部、高等部の他に寄宿舎もあり、夜でも子どもたちの声が絶えない。現在約160名の児童・生徒が在籍し、教諭やそれ以外の様々な職種の人たち(事務職員、用務員さん、給食調理員さんはもちろん、寄宿舎職員、バス運転手、介助職員など)、いわゆる学校の教職員が総勢約170名という、京都府下でも最大規模になる養護学校である。

毎朝9時、5台のスクールバスが次々に到着して、元気に子どもたちがおりてくる。元気とはいっても、先生に抱きかかえられてくる子、手スリにしっかりつかまりながら一步一步ゆっくりの子、車椅子に乗っておりてくる子等々、子どもたちの様子は様々である。この時間帯のバスロータリー・学校玄関周辺は、車椅子が行きかい、杖をつきながら歩く子や、かたや下駄箱に向かって全速力で駆け出す子、介助する先生、さらには子どもを送ってきた保護者などでおよそ百名近くの間人が集まり大変な混雑である。養護学校の活気をまさに目で見、感じることでできる時間帯でもある。現在私は、高等部11組の担任である。受け持つ生徒数は6人、うち4人は日常的に車椅子を利用している。残りの2人もひとりで歩行できるものの、非常に不安定な歩き方である。全員が知的な障害を持ち、またほとんどの生徒が何らかの言語障害も合わせもっている。認識面の発達は、およそ4歳頃から8歳頃までといわれている子どもたちである。こんな風を書いてしまうと、なんとなく暗い病院のようなイメージを持たれるかもしれないが、そんなことはない。子どもたちはとても元気ににぎやかである。とにかくよくしゃべる。プロ野球の話や吉本のお笑い、芸能界の話題から時には政治の話まで、話題には事欠かない。時間割には、ホームルームや機能訓練、言語訓練などの他に、数学や国語・理科・社会・音楽・美術などの教科名がならんでいる。養護学校ということで一般校のようにはっきりとした教科担任制にはならないが、現在は、一応、私が社会科の中心ということで、一定の教科学習が可能で2クラス

で社会科の授業を受け持っている。

昨年、京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下、埋文センター)からこの学校に赴任したときに、私が一番はじめにやらなくてはならなかった仕事が、子どもたちの障害や状況を理解することと同時に、社会科の授業をどうしていくのか考えることだった。一般校のように、ありきたりの教科書を使うわけにはいかない、すでにできあがったレール(カリキュラム)があるわけでもない、目の前の子どもたちの状況に合わせて毎年その内容を考えていかなくてはならないのである。おおいに悩んだ末にまず取り組んだことが、私がこの学校に来る前にやっていた仕事、つまり埋文センターでやっていた仕事のことをわかってもらおうということである。何のために発掘調査が必要なのか、発掘調査で何がわかるのか、なぜ昔のことがわかるのか、どうしてまるで見てきたように歴史の教科書には書かれているのか等々、この学校に赴任してきたときの私の自己紹介を受けて出てきた、生徒たちの疑問や質問に答えていこうということである。障害や認識の程度も様々な生徒たちに発掘のことをわかってもらおうというのは、当然のことながら簡単ではない。ましてや発掘調査なんて見たことのない生徒の方が断然多い。しかし私自身もびっくりしたが、生徒の中には、私が初めて調査員としての一步を踏み出すことになった調査地の上にその後建てられた団地に住んでいる者もあり、生徒たちにとって身近な長岡京での調査のことなど結構興味を持ってくれたようである。自分たちの学んでいる学校や、生活している家の下に大昔の都の跡が眠っていること、教室の窓から見える竹やぶの中にも古代の人達の墓があることなどを知り、子どもたちなりにちょっと嬉しくなったようである。

実際の授業の中では、できるだけ新聞記事も利用するようにした。考古学や発掘の記事はほとんど毎日のように掲載されているので話題には事欠かない。赴任したての4月、エチオピアで発見されたガルヒ猿人の化石の話題に始まって、石斧づくり、木材伐採などすべて縄文の技術で高床建物を復元したという富山県桜町遺跡の記事、飛鳥京の宮殿苑池の遺構が見つかった話、そして9月には、埋文センターが調査した峰山町の大墳丘墓のこと、自分も調査に参加していた大山崎町下植野南遺跡の記事、年が明けると、長岡京で見つかった離宮跡について、そしてきわめつけは、埼玉県で50万年前の建物跡が見つかったというニュースや、またもや明日香村で亀形石造物が出土したという記事、さらにホケノ山古墳のビッグニュースなどである。今ふり返ってみるとそれらの記事は、まさに教科書級、教科書の書き換え、追加を迫るような内容ばかりで、生徒たちといっしょに私自身が、つぎの教科書はいったいどうなるのだろうと心配するほどであった。このような事実の積み重ねで、少しずつ古代のことがわかっていくのだという話をするには、うってつけの記事ばかりであった。養護学校の社会科の実践としてはまだまだ不十分で、様々な課題を残した

と思っているのであるが、生徒たちはそれなりに受け止めてくれたようである。長岡京の離宮跡の調査については、家が近くということで、実際に現場を見に行ったという生徒もいた。くわしく話を聞いてみると、どうやら現場まで行ったものの、結局中には入ることができずに、フェンスの間隙からのぞいたところ、ブルーシートが見えただけということだったのであるが。ほんの少しだけではあるが、ニュースや新聞記事にも目を向けられるようになってきたようである。近頃は、私のことを「穴掘りおじさん」などと呼ぶ生徒まで出てきた。もちろんこれは、彼らなりに親しみを込めた表現方法なので、喜ぶべきことと思っているのであるが・・・。

この他にも、直接社会科の授業とは関わらないが、1学期に、校外学習ということで三条高倉の京都文化博物館の見学に出かけた。以前、埋文センターに勤めておられた学芸員の土橋さんにも大変お世話になりながら、大変中身の濃い見学をすることができた。生徒たちにとっては、非常に印象深い経験になったようであるが、私にとっては、障害を持つ人達、特に車椅子で生活する人達が、バスや電車で移動することが予想以上に大変であることをあらためて思い知らされた校外学習でもあった。しかし、だからといって、学校や家の中に閉じこもってばかりはいられない。障害があるが故にどうしても経験不足になりがちな生徒たちばかりである。ほんのわずかな段差が、彼らが外に出ることを拒んでいるのである。学校の近くには、向日市文化資料館があるし、「小さな展覧会」を見学に行く機会をつくることもできる。これからもっとどンドン外に出て、様々な資料を実際に見たり、ふれたりする学習に取り組んでいきたいと考えている。そうすることで、さらに世の中の様々なバリアフリーも実現していけるのではないかと思う。

それからもうひとつ、生徒たちとの関係や授業以外に、私がこの学校でやらなくてはならなかったのが、まわりの職員、先生方に埋蔵文化財、発掘調査、埋文センターのことを理解してもらうということである。学校というところには、よい意味で子どもたち以上に疑問のかたまりのような人、どんなことにもすぐに興味を持つ人がたくさんいる。そこに、発掘調査で穴掘りをしていたらしい、学校教育とは直接に関係のない職場からめずらしいやつがやってきたということで、本当にいろんなことを聞かれることになった。多くの人が働く職場の中で、赴任してきたときは、ちょっとした有名人状態であった。「テレビなどで見るように、地面に這いつくばってハケでちょちょやっていたのか?」、「あれで本当に何かわかるのか?」、「本当に柱の跡なんて見つかるのか?」などということに始まって、しばしば報道される各地の調査成果について、さらには古代の自然環境や様々な技術力についてということまで、その内容は様々である。最近では、NHKの朝の連続テレビ小説の中で、主人公の夫が遺跡の発掘にのめり込む設定で物語が展開したこともあって、そ

の中でもふれられていた、調査費用や遺跡の保存について聞かれたこともあった。それから私自身も新聞報道などは、できるだけ見逃さないようにしていたつもりであるが、それでも私の知らないことについて、並んで車椅子を押しながら、「あんな記事がありましたね。すごいですね。」と突然言われて、あわてることもよくあった。また、学校のある乙訓地域においては、毎日どこかで発掘調査をやっているようなものなので、よくあそこで調査をやっている、ここでやっていたということをわざわざ教えに来てくれる人もいた。今も学校の隣で調査がなされているようである。子供と一緒に散歩に出かけた先生がすぐに教えてくれた。それも一人ではない。生徒も含めると、同じ日に四回もその話を聞くことになった。最近では、ホケノ山古墳のニュースから、邪馬台国についての事もよく聞かれる。正直に言うと、忙しいときには閉口することもあったし、同じ話題を何度も聞かされたり、話さなくてはならないことなど、少々うんざりすることもあったが、ちょっとだけ鼻が高かったのも事実である。同時に、私には少し荷が重い、埋文センターにいるときにもっといろいろなことを勉強しておけばよかったと、今さらながらに思うこともあった。しかしまた、今は亡き堤さんに、教員出向者のための研修会の中で、私のような体験をしたものが、「生徒やまわりの先生方の文化財や発掘調査についての疑問に、ていねいにこたえてあげることが、文化財保護の第一歩になる」、そうすることで、私のような「教員出向の者が埋文センターで仕事をしたことの意味がある」と、言われたことを思い出し、今まさにそのことを実践しているのだと実感しているのである。

私は本来、障害児教育をこころざし京都府教育委員会に採用された教員である。初任地である盲学校で、視力に障害を持つ子供たちに点字や拡大した文字を使ったりして社会科を教えることになったのを皮切りに、その後、一般の中学校へ転出し、様々な体験をしてきた。最近の新聞紙上をにぎわしている、いろいろな教育上の困難にも直面してきた。中学生に罵声を浴びせられ、時には殴りかかれ、自分自身の尊厳も傷つけられるということは大変つらいことであった。しかし同時に、自分が関わる子どもたちの成長という、教師にしか味わえない大きな感動も数多く経験してきた。そして1995年、縁あって京都府埋蔵文化財調査研究センターで、埋蔵文化財の発掘調査という仕事をするようになったのである。この調査員という仕事に携わるようになった時の大きな不安と、自分なりの思いを少し綴ったのが『京都府埋蔵文化財論集』第3集に寄せた「雑感・・・新米調査員として、今思うこと」である。それから4年間、京都府下のいくつかの現場で発掘調査の仕事に携わった。今思い返してみると、ちょっと気楽な言い方で申し訳ないような気がするが、私にとっては埋文センターに勤務し、発掘調査の仕事に携わったことは、ちょうど4年間大学で勉強をしてきたような感じがしている。様々な調査や、科学的手法によって得られ

た事実にもみとづき、その事実を積み重ねることで人間の歴史を解き明かそうとする考古学の方法や、土に埋められる小さな遺物や土器に刻まれるかすかな文様も見逃さない、そしてわずかな土色、土質の変化から様々な情報を読みとり、判断をしていく繊細で鋭い観察力や洞察力などが求められる実際の現場での調査、さらに淡々と調査に取り組む各調査員の方々の姿勢は、学生時代以来忘れかけていた学問的感動をあらためて感じさせてくれた。私自身は、現場では多くの失敗を犯し、冷や汗をかくことも多々あったが、先輩調査員の方々や補助員さん、整理員さん、作業員さんをはじめ多くの人々に助けられながら、なんとか最低限の責任は果たせたのではないかと、今は思っている。この4年間で、ただ教師を続けているだけでは絶対に味わえないような、多くの貴重な経験、体験をすることができた。そして数多くの人との出会いがあった。このことは、本来の私の仕事である教育をすすめるうえにおいても、さらには私自身のこれからの人生のうえにおいても、非常に大きな糧となるものであると思っている。

埋文センターで仕事をしたことで得たことは、直接調査に関係すること以外にもたくさんある。少し話がずれるが、具体的なこととして、カメラの仕組みや写真の撮り方なども埋文センターで教えてもらったことのひとつである。何のためにその写真を撮るのか、何の写真を撮るのか、その写真で何が記録され、どんなことを表現するのかなど、これは今学校で、生徒の成長の記録を残していくということが多いに役に立っていることである。他にも、報告書の作り方、作図の仕方などは、クラスだよりをはじめ各種の書類を作ったりする際に、また現場で必要だった測量の方法、できるだけ正確に測るということなどは、グラウンドの白線をひく時や大きな作品をつくったりするときなどに応用していることである。大げさなことのようだが、読む人のことを考えて見やすい書類を作成することや、一本の線を正確に書くことなどはけっこう曖昧にされることでもある。障害を持つ生徒たちを前にして、今あらためてその重要性を感じている。さらには、調査の記録や報告書の作成にパソコンを使う機会も多く、埋文センターでその使い方もいろいろおぼえることになったが、今では学校の情報教育部を任せられ、パソコンを使った授業やクラブの指導、職員のパソコン研修なども受け持つことにもなった。現在私は、社会科で発掘のことを話す先生であると同時に、パソコンの先生でもある。今は、生徒が電子メールで新聞に載っていた遺跡のことを聞いてきたり、インターネットで記事の検索をしたりする時代なのである。

「発掘の仕事と、学校の仕事とでは、どっちが面白い？」という趣旨の質問をよくされることがある。その質問をした人の立場や、その時の状況で、その質問の裏には大変多くのことが隠されていることを感じることもあり、なかなか答えにくいのであるが、今の私の答えの基本は、「くらべることでできるものではないが、どちらも面白いし、やりがいがあ

る」ということになる。もしかすると学校の教師を続けていただけでは、その仕事を面白くやりがいのある仕事とは言えなかったかもしれない。それどころか、とても悲観的な考え方に陥っていたかもしれない。実際そのような言い方をする教師がいることも知っているし、そうならざるを得ないくらいに今の教育の状況は多くの困難を抱えている。しかし私はありがたいことに、埋文センターで4年間にわたって貴重な経験や体験をさせてもらい、さらに多くのことを学ぶことができた。少し大げさな言い方だが、毎日太陽の光を浴び、外気に触れ、四季の移ろいを見ながら、古代の人々のロマンと、その偉大さを実際に自分の肌で感じることができた。今また障害児教育に携わりながら、いろいろと悩みはつきないし、大変なことも多いのであるが、いつも子どもたちに、そしてまわりの教師に励まされ、助けられながら、そして時々発掘調査の現場のことを思い出したりして、あらためて教育という仕事の魅力を感じているところである。当然のことであるが、埋文センターで得たことを活かして、少しでも発掘や文化財のことにくわしい先生としてこれからも頑張っていきたいと思う。障害を持つ子供たちにも、歴史を探る楽しさや、先人の知恵と力に学ぶべき事がたくさんあること、そしてなによりも、古代の人々によって残された貴重な財産を記録し保存するために数多くの努力がなされていること、その財産を大切にすることが、自分たちの未来を大切にすることでもあるということをきちんと伝えることのできる、そんな教師をめざしていきたいと思っているのである。

埋文センターで仕事をするうえでは、本当に多くの人々にお世話になった。今私がしたり顔をしてこのようなことを書けるのも、その方々のおかげであると思っている。最後になったが、この紙面を借りてあらためてお礼申し上げたい。

(たけした・しろう＝京都府立向日が丘養護学校教諭)